

なるほど! 国際交渉

第16回 いよいよパリCOP21を前に:
パリ会議は成功できるか?

WWFジャパン 気候変動・エネルギープロジェクトリーダー 小西 雅子

**Q** パリCOP21は成功できるの?

世界190カ国が温暖化対策を国連の条約で定めて協調して実施し始めたのが1992年の気候変動枠組条約からで、法的に拘束力のある京都議定書を経て、いよいよ2020年以降の新しい国際枠組みに合意するCOP21が年末に迫ってきました。

実は2009年のCOP15の時には、京都議定書の次の約束期間を決める会議で、世界は合意に至ることができず、緩い自主的な約束に留まったことがありました。果たして今回のパリCOP21は成功できるのか、危ぶむ声も多く聞かれます。しかしCOP15とは違って今回のパリでは新しい国際枠組みは合意できると私は思います。なぜならば、前よりも準備が整っているから。世界排出第1位の中国と第2位のアメリカがまず積極的な姿勢を見せています。もともと積極的なEUと合わせると世界の排出量の半分を占める国々が前向きなのです。

10月15日段階で、世界149カ国がすでに2020年以降に掲げる削減目標案を国連に提出しており、さらに提出国は増え続けています。京都議定書の時とは違って、先進国だけではなく、途上国も含めて出しており、すでに世界の排出量の8割強を占める国々が何らかの形の削減を行うと表明しているのです。さらにパリにおける合意(仮にパリ合意と呼ぶ)の下文書となるテキスト案が着々と準備されています。このテキスト案はCOP15の時には10月の段階では各国の言いたい放題がすべて掲載されたままで、ま

だ200頁くらいもあったのですが、今回は同じ時点で60頁程度に集約(*)されています。したがってパリは必ず合意に至るだろうと思います。

Q では温暖化は防げるの?

残念ながら気温上昇は避けられません。そこで交渉では、産業革命前に比べて2°C未満に気温上昇を抑えることで、何とか温暖化の悪影響と共存できる社会をつくることを目的としています。しかし、残念ながら現在世界が表明している目標案では、足し合わせても2°C未満を達成できる削減量には達しないと考えられています(グラフ)。それでも気温上昇は過去の温室効果ガスの累積排出量と比例するため、2030年の段階で2°C未満の達成が完全に不可能になるというわけではありません。

本来は、世界の国々が2°C未満を達成できる削減量まで、それぞれの削減目標を引き上げることができるならばベストなのですが、今の政治情勢ではほとんど不可能でしょう。それならば、次善の策として、パリにおける合意が“2°C未満達成シナリオの途上”であり、その後に削減量を増加させていくサイクルが、合意されるならば、パリの合意は成功だと言えるのではないかと、という認識が広がりつつあるのです。

Q サイクルとはどういうこと?

今までは、気候変動枠組条約、京都議定

書、その後のカンクン合意など、数年ごとに制度の存続をかけて、紆余曲折の国際交渉が行われ、世界が無為に消耗してきました。そのため今回のパリでは、その後に長く続く温暖化対策の枠組みが構築され、今回のパリ

では無理でも、いずれは2°C未満を達成できるような仕組みを持った長期的な枠組みが合意されるようにしたいと世界が動いています。

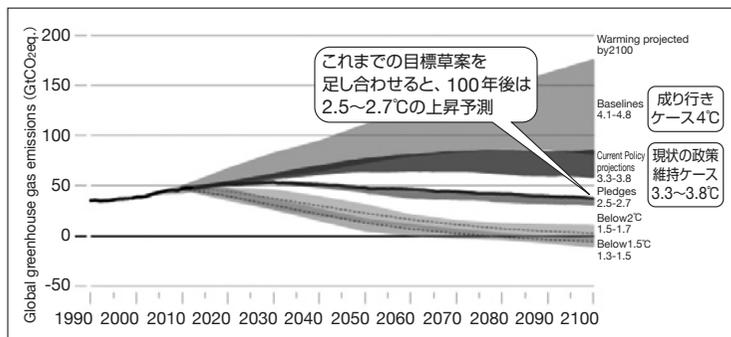
いずれは2°C未満を達成できるような仕組みとは、①2050年などに向かって長期的に削減し続けていくことの重要性を訴え(長期目標)、②5年などの短い期間で次の削減目標を出すことにし(5年約束期間)、③次の目標では必ず前の目標を上回ることとする(目標の発展=目標の後退を許さない)、④定期的に目標を足し合わせた全体目標を科学的に2°C未満達成可能かどうか検証する(科学的整合)、⑤各国が目標をちゃんと達成しているか見る仕組み(算定・報告・検証など)などを言います。

誤解を恐れずに簡単に言えば、各国が、2°C未満を達成できるような長期的な目標に向かって、5年ごとに自動的に今の目標を見直し、それを上回る目標を次の5年に掲げて、きちんと温暖化対策を実施していく、それを国際的にお互いに監視して、科学的に2°C未満達成に近づいているかどうかを見る、という仕組みになります。このサイクルがうまく回る枠組みの合意ができるならば、パリは成功ではないか、と考えられているのです。

Q サイクルを持ったパリ合意はできそう?

言うは易し、行うは難しです。一番の難題は、先進国と途上国の取り組みにどのよ

●10月1日までに提出された目標草案の総計で2100年に予測される気温上昇



出典: Climate Action TrackerからWWFジャパン加筆

うに差を認めるかでしょう。「差異化」と呼ばれるこの問題は、1990年の交渉開始当時の難題で、もともとは温暖化に責任のある先進国が温暖化対策をリードして当然という考え方でしたが、途上国が急速に発展し、排出量を急増させている中で、もはや1990年当時の先進国・途上国という区別は通じなくなってきています。そのため、今回のパリ合意は、京都議定書とは違って「すべての国を対象とする」ことが決まっています。しかしまだまだ飢餓や貧困に苦しむような途上国も多くある中、どのようにそれぞれの国の開発の程度にあわせて新たな「差異化」を考えるかが難題なのです。

サイクルの適用にも、どのように国々を差異化するか、がどうしても関わってきます。もちろん、温暖化の被害に苦しむ途上国への支援も必要ですし、開発の遅れている途上国が低炭素型の発展を進められるように先進国からの資金や技術支援も欠かせません。これらの難題は今回のパリで解決できるようなものでもありませんが、それでも世界は今の段階での妥協点を見つけて、パリの合意はなされていくと私は思います。

最終的には私たちすべての生活に影響する温暖化対策を決めるパリですから、皆様もぜひ「我が事」としてご注目くださいませ! その際にぜひサイクルの5つの条件を報道で探してみてくださいな。パリの成功は実は合意内容の詳細にありますから!

(※) COP21の準備会合(10月)終了時点の議長案